

原著

# 父親の育児幸福感

## —育児に対する信念との関係—

長野県看護大学  
清水 嘉子

### 抄 録

本研究は育児している父親の肯定的な情動を「育児幸福感」とし、肯定的な情動を感じる際の事情から、育児幸福感と育児事情の実態を明らかにした。さらに、育児幸福感と育児信念との検討を行った。6歳以下の乳幼児の父親に調査用紙を配布し、Lazarusの理論による7項目の肯定的な情動である安心、希望、愛情、喜び、感謝、同情、誇りについて育児中に感じる頻度を4段階評価した。また、それぞれの情動を感じる育児事情について自由記述を求めた。調査用紙は250名に配布し159名から回収された。

結果として父親が育児中に感じる肯定的な情動の中心は、「同情」「誇り」「安心」「希望」であり、ついで「感謝」があげられ、「喜び」「愛情」は少なかった。また、父親の育児中に感じる各情動頻度と各情動事情の記述件数とは必ずしも一致しなかった。育児幸福感を感じる際の育児事情は12項目に分類できた。主とした育児事情は、「子どもの成長・発達・健康」および「子どものしぐさ」などの子どもを中心とした構成であり、その他として「周囲の援助・声かけ・つながり」などであり、子どもや妻に対する感謝や同情としての記述が多く認められた。また、育児に対する信念が今後もかわらないと信じるのが育児幸福感とわずかながら関係していた。

キーワード：父親、母親、育児幸福感、育児信念、育児事情

### I. 緒 言

親にとって子どもを育てることは、人間性を豊かにし、生きる実感が湧き、発達課題を達成する過程として意義深い行為である。わが国の父親に関する研究では、1990年代から積極的に取り組まれているが、そのほとんどは家事・育児の協力、役割適応、父性意識の発達、子どもの発達や母親の育児行動への影響などに関するものである<sup>1)~11)</sup>。海外では父親の育児へのかかわり方など父親と子どもとの関係研究<sup>12) 13)</sup>が行われている。しかし、父親の育児参加が増えつつある今日、父親がどのような経験をしているのか十分解明されていないのが現状である。

また、育児に対する支援研究は、育児ストレスの対処やソーシャルサポートの視点から行われているが、育児の楽しみや喜びなどの育児幸福感を高

める視点からの研究は少ない。筆者は育児ストレスの研究<sup>14) 15)</sup>においてLazarusのストレス理論<sup>16)~18)</sup>を用い、ストレスを否定的な情動としてとらえ、否定的な情動を感じる際の育児事情に焦点を当てた。Lazarus<sup>6) 19)</sup>は、情動には肯定的な情動と否定的な情動があるとしており、肯定的情動研究については否定的情動研究に比べ十分に解明されていない現状にある。父親の子育てに伴う肯定的感情を明らかにすることにより、父親と看護者の接点が少ない中で、より有効な支援を検討するうえで意義があり、父親の育児研究の課題と考える。

幸福感は、一般的に「心の充足感を中心とした本人が現時点で実感する感情」ととらえることができ、Argyle<sup>20)</sup>は幸福について「情緒的側面と、認知的・熟慮的側面に大別できる」としている。幸福感の研究は、SWB (Subjective well-being: 主

観的幸福感)研究として特にQOL(Quality of life: 生活の質)研究の発展の中で生じている。人間の豊かさの研究の中で、SWBは個人の認知構造や心理状態を反映するQOLのより主観的側面を示すものと考えられている<sup>21)</sup>。

本研究では育児中に感じる肯定的な情動を「育児幸福感」としてとらえ、父親の育児幸福感と、幸福感を感じる際の育児に関連した出来事(育児事情)を明らかにすることを目的とした。さらに、本研究で明らかにされた育児幸福感と認知や評価に影響すると考えられている信念<sup>16~19)</sup>が関連しているのではないかと仮説に立ち検討を行った。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

6歳以下の乳幼児をもつ父親250名

### 2. 調査方法

- 1) 調査施設 S市Y, H幼稚園(2箇所)
- 2) 調査期間 平成16年9~10月
- 3) 倫理的配慮

本研究の調査に先立ち幼稚園長に調査の目的、方法、意義、守秘義務、研究の協力および協力拒否が可能であることなどを説明し、研究の協力への承諾を得た。対象者に対しては本調査の目的、方法、意義、守秘義務、研究の協力および協力拒否が可能であること、特定の個人的情報が遺漏しないよう処理する旨(コード化し廃棄する)を明記した依頼文を作成した。依頼文と調査用紙を園教諭より母親に配布し、夫(父親)に渡してもらうことを依頼した。調査用紙の回収は園で行われた。研究への同意は調査用紙への回答をもって同意の意思表示と判断した。

### 3. 調査内容

#### 1) 対象者の属性

父親の年齢、子どもの数、育児に対する考え(育児信念)やその強さの回答を求めた。

#### 2) 調査項目

信念とは、「理屈を越えて強く信じ込むところ」と一般的に考えられ、本研究では育児信念を、育児に対する考えとその強さ(変化の不変性)ととらえた。そこで、「子どもを生む価値」<sup>22)</sup>および「よい親の概念」<sup>23)</sup>から育児に対する考え方を参照として、信念の基本概念として考えられている態度、

努力、価値、役割、愛情に該当する項目を各1項目ずつ研究者が作成した。ただし愛情についてはさらに1項目付加し6項目とした(表5)。育児信念6項目に対する考えとして2選択肢(“賛成”, “反対”), 考えの強さとして5選択肢(“絶対変わらない”, “たぶん変わる”, “わからない”, “たぶん変わる”, “絶対変わる”, “絶対変わる”)とした。

また、父親が育児中に経験する肯定的な情動について、Lazarusの理論による7項目に着目し(①安心, ②希望, ③愛情, ④喜び, ⑤感謝, ⑥同情, ⑦誇り), 各項目に対する頻度を4段階(“いつもある” “ある程度ある” “たまにある” “まったくない”)で回答し、それぞれに想起起こした育児事情の自由記述を求めた。

### 4. データの分析方法

収集した自由記述の内容を研究者が1つの内容を意味する記述文に分けて整理した。また、親としての共通点、相違点を明らかにするため母親の育児幸福感で明らかにされた14分類<sup>24)</sup>を基準にしながらも、分類が難しい内容は新しい項目とした。分類された結果に対して、母性看護領域の教員に確認を求め、一致した結果を最終分析結果とした。一致しない項目については、話し合い合意を得た。さらに、情動の頻度(“いつもある”を4点, “ある程度ある”を3点, “たまにある”を2点, “まったくない”を1点とする)と育児信念(“賛成”2点, “反対”1点とする), 育児信念の強さ(“絶対変わらない”を5点, “たぶん変わる”を4点, “わからない”を3点, “たぶん変わる”を2点, “絶対変わる”1点とする)とピアソンの相関分析を行った。7項目の情動の頻度と6項目の育児信念の強さの相関分析を行った。また、7項目の情動の頻度の合計値を育児幸福感として、6項目の育児信念に対する考え方の合計値および信念の強さの合計値の相関分析を行った。

## III. 結果

### 1. 調査用紙の回収率

調査用紙の回収は159名、有効回答は159名、回収率は63.6%であった。

### 2. 対象の属性

父親の年齢の平均値は36.7 ± 8.6歳(最小値26歳, 最大値53歳), 子どもの数の平均値は1.7 ± 1.6

人 (最小値 1 人, 最大値 4 人) であった。

### 3. 父親の育児幸福感

#### 1) 育児中に感じる肯定的な情動の頻度

育児中に感じる①安心, ②希望, ③愛情, ④喜び, ⑤感謝, ⑥同情, ⑦誇りの情動別頻度では, 各平均値が安心は  $2.4 \pm 0.9$ , 希望は  $2.3 \pm 0.9$ , 愛情は  $1.9 \pm 0.9$ , 喜びは  $1.9 \pm 0.8$ , 感謝は  $2.1 \pm 0.8$ , 同情は  $3.2 \pm 1.1$ , 誇りは  $2.7 \pm 1.0$  であった。

#### 2) 父親の育児幸福感を感じる際の育児事情件数とその内容

##### ①情動別事情件数 (表 1)

それぞれの情動を感じる際の育児事情として自由記述に上がった内容は, 喜びが 95 件 (20.2%), 愛情が 85 件 (18.0%), 安心が 78 件 (16.7%), 感謝が 72 件 (15.3%), 希望が 72 件 (15.3%), 誇りが 46 件 (9.8%), 同情が 23 件 (4.9%), 父親の感じる情動別事情数は計 471 件であった。

##### ②育児事情別内容とその頻度 (表 2)

自由記述の内容を分析した結果, 育児幸福感を感じる際の事情を 12 項目に分類できた。

育児幸福感を感じる際の事情別内容は, 「子どもの成長・発達・健康」として, 子どもの成長を感じたとき, 以前より進歩してできるようになったとき, 新しいことができるようになったときなどの事情があり, 147 件 (31.2%) と, もっとも多く

の育児事情を含んでいた。ついで, 「子どものしぐさ」として, かわいい笑顔, 寝顔を見たとき, 習ったことを恥ずかしそうに一生懸命やってみせる, 遊んでいる姿などで 68 件 (14.4%) であった。さらに, 「子どもの存在」として, 生まれてきてくれてありがたいの気持ち, 子どもがいるから頑張れる, 生きていける, 救われるなどで 67 件 (14.2%) であった。これらの 3 項目が育児事情全体の約 60% を占めていた。

また, 件数は少ないが「周囲の援助・声かけ・つながり」として, 妻の頑張り, 妻が一生懸命育児している, 妻が自分のできない分を補ってくれるなど妻に対するもので 39 件 (8.3%), 「子どもとのコミュニケーション」として, 子どもと遊んでいるとき, 一緒にお風呂に入ったとき, 子どもに接したとき, 顔を合わせたときなどで 32 件 (6.8%), 「子どもの優しさ・愛情」として, 親のことを気遣ってくれたとき, プレゼントをくれたとき, 兄弟をかわいがっているときなどで 29 件 (6.3%), 「子ども・自分・家族の将来」として, 子どもの将来が楽しみ, この先どのように育ってくれるか, 子どもの将来に夢を感じる, 元気に育ってほしいなどで 25 件 (5.3%), 「自分の生き方・成長」として, 自分自身が成長したと思えたとき, 自分の気づかないことに気づかされたとき, 自分が親に育てら

表 1 父親の育児幸福感を感じる際の情動別事情数

件数

No	事情	情動項目						
		喜び	愛情	安心	感謝	希望	誇り	同情
1	子どもの成長・発達・健康	53	2	29	13	37	13	0
2	子どものしぐさ	13	32	15	4	2	2	0
3	子どもの存在	4	6	11	20	4	20	2
4	周囲の声かけ・援助・つながり	0	1	7	17	0	0	14
5	子どもとのコミュニケーション	9	14	6	1	2	0	0
6	子どもの優しさ・愛情	9	8	3	5	1	3	0
7	子ども・自分・家族の将来	0	1	0	0	24	0	0
8	自分の生き方・成長	2	2	1	10	2	3	0
9	自然に感じる	1	8	0	0	0	4	0
10	家庭円満・日常生活	3	1	5	2	0	1	0
11	子どもに必要とされる	1	10	1	0	0	0	0
12	物事への共感	0	0	0	0	0	0	7
合計件数 471 (%)		95 (20.2)	85 (18.0)	78 (16.7)	72 (15.3)	72 (15.3)	46 (9.8)	23 (4.9)

表2 父親の育児幸福感を感じる際の事情別内容と件数

No	事情	内 容	合計件数 (%)
1	子どもの成長・発達・健康	子どもの成長を感じたとき。以前より進歩してできるようになった。新しいことができるようになったとき。いろいろと話ができるようになった。できないことを最後までやり遂げたとき。素早く育ってくれている。健康で大きなけがもなく育ってくれている。よいこと悪いことの判断ができるようになった。	147 (31.2)
2	子どものしぐさ	かわいい笑顔。寝顔を見たとき。置ったことを恥ずかしそうに、一生懸命やって見せてくれる。遊んでいる姿。子どもらしいしぐさを見たとき。子どものかわいい部分を見たとき。頑張ってやっている姿。無邪気な姿。	68 (14.4)
3	子どもの存在	生まれてきてくれてありがとうの気持ち。子どもがいるからがんばれる。子どもがいるから生きていける。子どもにふらいときなど救われることがある。子どもにストレスを忘れさせてもらうことがある。疲れているとき気分転換になる。子どもがいるから今の自分がある。親としての喜びを感じさせてくれる。	67 (14.2)
4	周囲の声かけ・援助・つながり	妻のがんばり。妻が一生懸命育児している。妻が自分のできない分を補ってくれる。毎日長い時間を育児に費やす妻に感謝。妻や親に助けられている。親や妻の気持ちに感謝。妻や周囲の人に助けられている。周囲のすべてとの関係がある。	39 ( 8.3)
5	子どもとのコミュニケーション	子どもと遊んでいるとき。一緒にお風呂にはいったとき。子どもに接したとき。顔を合わせたとき。抱きしめたとき。話をしたとき。「パパお帰る」というとき。信頼関係を感じたとき。泣いているのをあやして泣きやんだとき。甘えてきたとき。	32 ( 6.8)
6	子どもの優しさ・愛情	親のことを気遣ってくれたとき。プレゼントをくれたとき。兄弟をかわいがっているとき。自分のことを子どもが考えてくれること。自分のためにお菓子を残しておいてくれたとき。送りや出迎えをいつもしてくれる。他人に親切にしているとき。生き物を大切にしている。子どもからの感謝の言葉を聞いたとき。子ども同士の友情を見たり聞いたりしたとき。お母さんを助けているとき。	29 ( 6.2)
7	子ども・自分・家族の将来	子どもの将来が楽しみ。この先どのように育ってくれるか。子どもの将来に夢を感じる。元気に育ってほしい。何かスポーツをやってほしい。大事なことを引き継いでほしい。どんな子に育ってくれるか楽しみ。子どもには無限の可能性がある。健康で人に迷惑をかけないような人間になってほしい。明るく優しい思いやりのある子になってほしい。何事も全力でやってほしい。平均に何事もできればいい。	25 ( 5.3)
8	自分の生き方・成長	自分自身が成長したと思えたとき。自分にかけていること、気づかない部分を気づかされたとき。自分も子どもも成長できる。自分が親に育てられたこと。自分自身を見直すいい機会を与えられた。逆に教えられることがある。親としてどんなことでもする。	20 ( 4.2)
9	自然に感じる	いつでもどんなときでも。よくわからないがいつもかわいい。あたり前のこと。普通の親の気持ち。何となく。親としての本能。とにかく大切。	13 ( 2.8)
10	家庭円満・日常生活	家族をもったこと。家族の存在が癒しになっている。家族がいつも一緒にいるとき。日々生活。1日何もなく元気なこと。	12 ( 2.5)
11	子どもに必要とされる	親を慕ってくれる。頼られるとき。「パパ」といってくっついてきたとき。「抱っこして」というとき。助けを求められたとき。子どもにとって自分が大切な存在だと感じたとき。	12 ( 2.6)
12	物事への共感	妻は大変である。子どもが母親に叱られているとき。祖父母に叱られているとき。子どもが他の子にうまくとけ込めないでいるとき。一人っ子なので寂しいのでは。子どもが悲しい。寂しい思いをしたとき。自分の時代と違いすべての面でハイレベルで就職活動も大変。育児で疲れた妻の顔を見たとき。妻が育児に追われ母親同士の交遊がなかなかとれないこと。周囲の人の育児に関する喜びや悩みに同感する。性格的にマイナスの要素が自分と同じと感じたとき。	7 ( 1.5)

471

れたことなどで20件(4.2%)、「自然に感じる」として、いつでもどんなときでも、よくわからないがいつもかわいい、あたり前のこと、何となくなどで13件(2.8%)、「家庭円満・日常生活」として、家族をもったことや家族の存在が癒しになっている、家族がいつも一緒にいるなどで12件(2.5%)、同じく「子どもに必要とされる」として、親を慕ってくれる、頼られるとき、「パパ」といったとき、抱っこしてというときなどで12件(2.5%)であった。

もっとも件数の少なかった育児事情は、「物事

への共感」として、妻は大変である、子どもが母親や祖父母に叱られているとき、子どもが他の子にうまくとけ込めないでいるとき、1人っ子なので寂しいのではなどで7件(1.5%)であった。表1のすべての情動反応を伴う育児事情は「子どもの存在」であった。ついで「子どもの成長」「子どものしぐさ」「子どもの優しさ・愛情」「自分の生き方・成長」であった。

また、471件中の育児事情間の関連では、自由記述の同一文章内に関連性をもった記述の表記はみられなかった。

4. 父親の育児幸福感和育児信念

1) 育児信念に対する考え方とその強さ (表 3)

育児信念に対する考え方で賛成が過半数を示していた項目は、「父親は子どもに対し愛情をいつも抱いているものだ」が 74.8%、「子育ては自分にとって価値がある」が 74.2%、「父親は子どもに対して無償の愛を与えるものだ」が 65.4%、反対が過半数を示していた項目は、「子育ては女の仕事だ」が 74.2%、「子どもに対して完璧な父親でなければならない」が 66.0%であった。「子どもがよく育つも悪く育つも 100%親の努力にかかっている」に反対したものが 45.9%を占めていた。

また、信念の強さには、すべての項目において「絶対変わらない」と「たぶん変わらない」を含めると最大で 63.5%から最小で 41.6%を占め、父親の信念に対する変化の可能性は低いことが示された。

2) 育児幸福感和育児信念 (表 4, 5)

育児幸福感和育児信念の強さに弱い相関が認められた ( $r = 0.226, p < 0.05$ )。育児信念の強さと各情動頻度の相関では、「子どもに対して完璧な父親でなくてよい」の信念に対して変わらないとする父親は「希望」と弱い相関が認められた ( $r = 0.221, p < 0.05$ )。「子どもに対する無償の愛を抱き与えるものだ」の信念に対して変わらないとする父親は「希望」( $r = 0.259, p < 0.01$ )、「愛情」( $r = 0.353, p < 0.01$ )、「感謝」( $r = 0.301, p < 0.01$ )、「誇り」( $r = 0.253, p < 0.01$ )、「同情」と弱い相関が認められた ( $r = 0.199, p < 0.05$ )。「子どもに対し愛情をいつも抱いているもの」の信念に対して変わらないとする父親は、「愛情」( $r = 0.247, p < 0.01$ )、「感謝」と弱い相関が認められた ( $r = 0.291, p < 0.01$ )。「子育ては自分にとって価値がある」の信念に対して変わらないとする父親は「愛情」

表 3 父親の育児信念に対する考え方と強さ

n = 159 (%)

信念項目	考え方と強さ		n = 159 (%)							
	賛成 (%)	反対 (%)	絶対 変わらない (%)	たぶん 変わる (%)	わから ない (%)	たぶん 変わる (%)	絶対 変わる (%)			
子どもに対して完璧な父親でなければならない	25 15.7	105 66.0	39 24.5	42 26.4	27 17.0	17 10.7	3 1.9			
父親とは子どもに対して無償の愛を与えるものだ	104 65.4	24 15.1	59 37.1	27 17.0	28 17.6	11 6.9	1 0.6			
子どもがよく育つも悪く育つも 100%親の努力にかかっている	55 34.6	73 45.9	30 18.9	44 27.7	31 19.5	16 10.1	7 4.2			
子育ては自分にとって価値がある	118 74.2	10 6.3	53 33.3	39 24.5	20 12.6	9 5.7	4 2.5			
子育ては女の仕事だ	11 6.9	118 74.2	51 32.1	42 26.4	15 9.4	16 10.1	4 2.5			
父親は子どもに対し愛情をいつも抱いているものだ	119 74.8	11 6.9	69 43.4	32 20.1	11 6.9	12 7.5	0 0			

\* 欠損値は削除して表示

表 4 父親の育児幸福感和育児信念

Pearson の相関分析

信念	信念に対する考え	信念の強さ
育児幸福感	0.070	0.226 *

; 育児幸福感 - 肯定情動を感じる頻度 (7 情動の合計)

\*  $p < 0.05$

表 5 父親の育児信念の強さと情動頻度の相関

Pearson の相関分析

信念	情動	安心	希望	愛情	喜び	感謝	同情	誇り
子どもに対して完璧な父親でなければならない		0.017	0.221 **	0.084	0.314 *	0.090	0.002	0.118
父親とは子どもに対して無償の愛を与えるものだ		0.142	0.259 *	0.353 *	0.192	0.301 *	0.199 **	0.253 *
子どもがよく育つも悪く育つも 100%親の努力にかかっている		0.033	0.331 *	0.071	0.286 *	0.087	0.047	0.060
子育ては自分にとって価値がある		0.152	0.060	0.355 *	0.115	0.198 **	0.085	0.261 *
子育ては女の仕事だ		0.090	0.179 **	0.171	0.378 *	0.213 **	0.093	0.271 *
父親は子どもに対し愛情をいつも抱いているものだ		0.090	0.096	0.247 *	0.069	0.291 *	0.076	0.135

\*\*  $p < 0.01$

\*  $p < 0.05$

( $r = 0.355, p < 0.01$ ), 「誇り」( $r = 0.261, p < 0.01$ ), 「感謝」と弱い相関が認められた ( $r = 0.198, p < 0.05$ )。また, 「子どもがよく育つも悪く育つも100%親の努力にかかっている」の信念に対して変わらないとする父親は「希望」( $r = 0.331, p < 0.01$ ), 「喜び」と弱い相関が認められた ( $r = 0.286, p < 0.01$ )。「子育ては女の仕事だ」の信念に対して変わらないとする父親は「喜び」( $r = 0.378, p < 0.01$ ), 「誇り」( $r = 0.271, p < 0.01$ ), 「希望」( $r = 0.179, p < 0.05$ ), 「感謝」と弱い相関が認められた ( $r = 0.213, p < 0.05$ )。しかし, 育児信念と安心の情動頻度とは相関が認められなかった。

#### IV. 考察

##### 1. 父親の育児幸福感を感じる際の情動反応

父親が育児中に感じる肯定的な情動の中心となったのは, 「同情」「誇り」「安心」「希望」であり, ついで「感謝」があげられ, 「喜び」「愛情」は少なかった。「同情」「誇り」「安心」「希望」は父親の育児幸福感の主たる情動ではあるが, 感謝, 喜び, 愛情についても見逃せない情動といえる。

特に母親との比較<sup>24)</sup>では, 母親の研究では, 子どもの年齢が3歳以下のため単純に比較することは難しいが父親は同情や誇り, 安心に高い値を示しており, こうした情動は父親の育児幸福感の特徴と考えられた。

育児幸福感の主たる育児事情は, 子どもを中心に構成されているが, 妻に対する同情や誇りの情動も生じていた。喜びや愛情の情動頻度が少なかったのは, 父親は子どもと接する時間が少ないことが関係していると推察された。

同情は「周囲の声がけ・援助・つながり」「物事への共感」「子どもの存在」の3項目であり, どちらかという和幸福感の中でも特異な情動といえる。これは「同情」という言葉が, 「共感」「共鳴」「賛成」といった肯定的な意味のほかに, 「哀れみ」や「情け」などの否定的な意味をもつことが影響していると考えられる。また, 「同情」は, 情動件数としてはもっとも少なかったが, 感じる頻度としては, もっとも高かった。

また, 感じる頻度では誇りや安心, 希望が高く, 感謝, 愛情, 喜びが低かったことから, 情動を感じる頻度と育児事情の記述件数が比例していない

ことが明らかとなった。育児事情は具体的な項目のほうが例をあげやすく, 件数も多くなりやすいが, その情動に伴う育児事情の中で, 抽象的な項目の占める割合が高くなると, 具体的な例があげにくかったことが, 情動を感じる頻度と育児事情の記述件数の順位の違いに関係していたと考えられた。

次に, 育児幸福感を感じる育児事情では, 「子どもの存在」と「周囲の声がけ・援助・つながり」「子どもとのコミュニケーション」と「子どもの優しさ・愛情」に順位の逆転がみられたが, 母親と同様の結果を示していた<sup>24)</sup>。母親の育児幸福感で認められていた「妊娠・出産・育児の経験」は, 父親にはみられない幸福感であった。一方, 父親の育児幸福感は, 子どもを中心としながらも, 妻に対する感謝や同情に関するものが特徴といえる。母親と父親の比較に関した先行研究において養護の能力<sup>25)</sup>, 児に対する敏感性<sup>26)</sup>, アタッチメント<sup>27)</sup>に差はないとされ, 本研究結果においても父親と母親は, 親としてほぼ共通した育児幸福感を抱えていることが明らかになった。

また, これらの情動の調節は, 否定的情動を調整する右半球が大脳新皮質において優位である<sup>28-30)</sup>。このことは, 人間の情動は通常否定的な調整を受けやすく, 育児などストレスを感じやすい状況下では肯定的な情動を感じにくく, 幸福感を感じることが困難な状態にある。肯定的な情動の中核である視床下部が動機づけ行動の起こりやすい部位であることから, 本研究で着目した肯定的な情動を強化することによって育児に対する積極性を促すことができると考えられた。また, 本研究の結果からも, 子どもの存在や関係に目を向けることに加えて妻や家族とのポジティブな側面に意識を向けていくことが, 父親の育児幸福感を高めることに通じると考えられた。具体的には, 遊びをとおして子どもとかかわる場面を増やし関係性をもつこと, 妻と子どものことの会話をすること, 家族との時間を大切にしていくことが有効であろう。このことは父親としての意識の発達にもよい影響をもたらすといえる<sup>31)</sup>。また, 妻に対する感謝や誇りなどの感情を言葉で伝えることで, 互いの育児幸福感が高められると考えられた。

## 2. 父親の育児幸福感と育児信念

育児は人としての成長に影響しており、その成長を支えるのは日々の育児行動の1つひとつである。父親の育児信念は、子どもへの愛情の必要性や育児の価値を認め、親としての完璧さや努力の必要性や育児を女性のみの仕事とは考えていないなど先行研究とはほぼ同様の傾向を示していた<sup>15, 31)</sup>。また、信念に対する強さ、つまり不変性についても変わらないとする傾向も同様の結果を示していた。このことから、3回にわたる育児信念の研究結果は、現代の子育てしている親の傾向を示していると考えられた。

また、育児信念の強さと安心を除く情動が弱い相関を示しており、「今後も変わらない」とする不変の信念をもつことが、父親の育児に対する認知、評価に何らかの影響を及ぼしていると考えられた。しかし、育児幸福感が高まることによって強固な信念をもつに至るのかの因果関係の解明は今後の課題として残されている。本結果が弱い相関にとどまっていることから、むしろ父親の育児幸福感には他の要因が関係していると考え、他の影響要因を明らかにする研究に取り組む必要があると考える。

## V. 結語

父親が育児中に感じる肯定的な情動の中心は、「同情」「誇り」「安心」「希望」であり、ついで「感謝」があげられ、「喜び」「愛情」は少なかった。また、情動の頻度と記述件数とは必ずしも一致しなかった。これらの情動に関連した育児事情は、主として「子どもの成長・発達・健康」および「子どものしぐさ」などの子どもを中心とした構成であり、子どもとの関係の中で育児幸福感が認められていた。さらに、「周囲の援助・声かけ・つながり」や「自分の生き方・成長」「家庭円満・日常生活」「物事への共感」があった。また、育児に対する信念が今後もかわらないと信じるのが育児幸福感とわずかながら関係していたが、本結果を受けて育児幸福感に影響する要因は他にあると考えべきである。男女共同参画の時代にあってさまざまな角度から父親への支援を検討していくことが課題となる中で、本研究で明らかにされた父親の育児幸福感とその育児事情に着目し、肯定的な

情動を喚起する働きかけが重要になってくると考える。

(謝辞:最後に本研究にあたり、調査にご協力いただきましたお父様方、およびS市Y、H幼稚園の皆様へ深く感謝いたします)

## 文 献

- 1) 柏木恵子編著. 父親の発達心理学; 父性の現在とその周辺. 東京, 川島書店, 1993.
- 2) 尾形和男. 父親の育児と幼児の社会生活能力: 共働き家庭と専業主婦家庭の比較. 教育心理学研究. 1995, 4 (3), 335 - 342.
- 3) 岩田祐子, 森恵美, 前原澄子. 父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因. 日本看護科学学会誌. 1998, 18 (3), 21 - 36.
- 4) 岩田裕子. 父親についての文献研究. 筑波医短大研報. 1998, 9, 9 - 20.
- 5) 石井京子, 藤原千恵子, 日隅ふみ子. 父親としての意識の発達に及ぼす養育行動の分析. 小児保健研究. 1998, 57 (6), 67 - 72.
- 6) 小野寺敦子. 父親になる意識の形成過程. 発達心理学研究. 1998, 9 (2), 121 - 130.
- 7) 菅原ますみ. 父親の育児行動と夫婦関係、そして子どもの精神的健康との関連. 教育と情報. 1998, (483), 7 - 12.
- 8) 日隈ふみこ, 藤原千恵子, 石井京子. 親としての発達に関する研究; 1歳半児を持つ父親の育児家事行動分析から. 日本助産学会誌. 1999, 12 (2), 56 - 63.
- 9) 福丸由佳. 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観・子ども観; 父親の育児参加との関連. 発達心理学研究. 1999, 10 (3), 189 - 198.
- 10) 住田正樹. 父親の育児態度と母親の育児不安. 生活教育. 2002, 46 (3), 43 - 48.
- 11) 佐藤秀樹, 佐藤秀一, 鈴木幸雄. 育児期の子どもを抱えた過程における父親の家事・育児分担と母親の就労との関係. 厚生 の指標. 2000, 467 (5), 12 - 19.
- 12) Field T. Interraction behavior of primary

- versus secondary caretaker fathers. *Developmental psychology*. 1978, 14, 183 - 184.
- 13) Lamb ME. The development of father- infant Relationships. attachments in the first two years of life. In ME Lamb. F(ED.). *The Role of the Father in Child Development : Completely Revised and Updated*. 2nd ed. Wiley, 1981, 459 - 488.
- 14) 清水嘉子. 育児ストレスの実態研究: ストレス情動反応を中心にして. *母性衛生*. 2003, 44 (4), 372 - 378.
- 15) 清水嘉子. 父親の育児ストレスの実態に関する研究. *小児保健研究*. 2006, 65 (1), 26 - 34.
- 16) R Lazarus, S Folkman 著, 本明寛他訳. *ストレスの心理学*. 東京, 実務教育出版, 1996.
- 17) S Folkman 著, 黒田弘子訳. *パーソナル・コントロール, ストレス, コーピング・プロセス理論的分析*. *看護研究*. 1998, 21 (3), 35 - 52.
- 18) 本明寛. Lazarus のコーピング (対処) 理論. *看護研究*. 1998, 21 (3), 17 - 22.
- 19) 本明寛. ストレスと情動の関係. *ストレス科学学会誌*. 2000, 15 (3), 219 - 220.
- 20) Argyle M 著, 石田梅男訳. *幸福の心理学*. 東京, 誠信書房, 1994, 1 - 15, 218 - 237.
- 21) 石井留美. 主観的幸福感研究の動向. *コミュニティー心理学研究*. 1997, 1 (1), 94 - 107.
- 22) 柏木恵子, 永久ひさ. 女性における子どもの価値; 今なぜ子どもを産むか. *教育心理学研究*. 1999, 47, 70 - 79.
- 23) 清水弘司. 幼児を持つ母親の「よい子」「よい母親」「よい父親」概念. *家庭教育研究所紀要*. 1994, 15, 33 - 43.
- 24) 清水嘉子, 伊勢カンナ. 母親の育児幸福感と育児場面の実態. *母性衛生*. 2006, 47 (2), 344 - 351.
- 25) Parke RD, Sawin DB. The father's role in infancy A re-evaluatin *The Family Coordinator*, Oct, 1976, 365 - 371.
- 26) Broom BL. Impact of marital quality and psychological well-being on parental sensitivity. *Nursing research*. 1994, 43 (3), 138 - 143.
- 27) Jones LC. Father infant relationship in the first year of life. In *Dimensions of fatherhood*, ed. SMH Hanson, FW Bozett, Beverly Hills, Sage Publications, 1985, 92 - 114.
- 28) 内村英幸編. *情動と脳: 精神疾患の物質的基礎*. 東京, 金剛出版, 1981.
- 29) 伊藤正男, 梅本守, 山鳥重, 他. *岩波講座 認知科学 6*. 東京, 岩波書店, 1994.
- 30) Paul D MacLean 著, 法橋登編・解説. *三つの脳の変化*. 東京, 工作舎, 1994.
- 31) 清水嘉子. 母親の育児ストレスと育児信念の関係. *小児保健研究*. 2003, 46 (4), 558 - 568.



**Father's happiness in childcare**  
— Relationship with childcare believe —

Nagano College of Nursing  
Yoshiko Shimizu

**Abstract**

This study defines the happiness that fathers experience during childcare as a positive emotion, and sheds light on the facts and situations that contribute to the happy emotions experienced by fathers during childcare. The study also examines the relationships between happiness experienced during childcare and factors such as the time fathers spend involved in childcare and housework, and the confidence they have in their own views on childcare.

A questionnaire was distributed to fathers with children aged six or under, asking them to evaluate on a four-point scale the frequency of experiencing each of the seven emotions that are described as positive emotions in Lazarus's theory: peace, hope, love, joy, gratitude, sympathy, and pride. The questionnaire also included open-ended questions asking what childcare circumstances cause them to experience each of the emotional ranges. There were 159 responses out of 250 questionnaires distributed to those fathers.

The study revealed that sympathy, pride, peace and hope were the major positive emotions that fathers felt during childcare, followed by gratitude. On the other hand, the frequency of feeling joy and love was low. It was also found that the frequency of experiencing each of the positive emotions during childcare did not necessarily correlate with the number of times they mentioned the corresponding emotion in their responses to the open-ended questions. Responses on the circumstances under which happiness had been experienced during childcare were divided into 12 categories, with most related to children, such as "children's growth, development and health" and "children's gestures and actions." One of the other categories is "support from others, and communication opportunities and ties with others." With regard to the emotional ranges, gratitude to their children and wives and sympathy for them were frequently expressed in their responses to the open-ended questions.

Key words : fathers, mothers, childcare happiness, childcare believe, childcare event